

Śaḍakṣara について

前 谷 彰 (恵 紹)

0. *Śārdūlakarṇāvadāna* (ŚKAと略) では、刑罰を減ずる功德を持ち、除災の機能を有するとされる *ṣaḍakṣara-vidyā* (ŚVと略) が説かれることはよく知られている。この ŚV が若干の変遷を伴いながらも後代の様々な密教経典へ継承されて行った、その伝承形態については既に別稿において論じた¹⁾。ところが、この ŚV について幾つかの議論がなされては来たものの、ŚV そのものの語義については未だに明確にされていない。さらに、ŚV がいかなる宗教的基盤をもとに発生したかについてもまだまだ考究の余地が残されている。

W.Zinkgräf は、ŚKA に説かれる *Caṇḍāli* (*Mātaṅgi*) の用いたマントラの呪部における *Śikhigrahadeva* の語に着目し、これが *Atharva-Parīṣiṣṭa* 所属 *Kauśika-sūtra* に見出される *Graha-deva* に相当することを指摘した。さらに彼は、これによって *Caṇḍāli* (*Mātaṅgi*) が『アタルヴァ=ヴェーダ』の呪法の継承者であり、かかるマントラは後に仏教に摂入され、やがては *Mañjuśrīmūlakalpa* 等のタントラ文献へと受け継がれて行ったという見解を導き出した²⁾。そこで、本稿では彼のこのような方法論によって、同じく ŚKA における ŚV の呪部に見出される語に着目し、果たして ŚV とはいかなる語義を有し、いかなる宗教的基盤をもとに誕生するに至ったかについて考究して行くことにする。

I.1 ŚKA では、ŚV がシャーキヤ=ムニによって次のように説かれる³⁾。

iyam ānanda ṣaḍakṣari-vidyā ṣaḍbhiḥ samyakṣambuddhair bhāṣitā catu rbiḥ ca mahārājaiḥ śakreṇa devānām indreṇa brahmaṇ ca sahāpatinā / mayā cāitarhi śākyamuninā samyakṣambuddhena bhāṣitā / tvam apētarhy ānanda tāṃ dhāraya vācya paryavāpnuhi / yaduta yathā:

aṇḍare pāṇḍare kāraṇḍe keyure 'rcihaste kharagrīve bandhumati vīramati dhara vidha cilimile viloḍaya... abridgement ...svāhā

このように、ŚV は六人の正覚者によって説かれたとされている。また、四天王やブラフマン等によっても説かれ、さらに今またシャーキヤ=ムニ正覚者によ

って説かれたとされているのである。

ここでは特に呪部の *aṇḍare* から *bandhumati* までの語の内、まずは *bandhumati* の語を取り上げることにするが、因にこの箇所はチベット訳では [*aṇḍare keyure dhihaste saragebe bantamati*] (東北 No. 358, 417b⁴=北京 No. 1027, 243b⁵) と音写され、*pāṇḍare kārāṇḍe* 等の語の音写を欠くと同時に、*bandhumati* に対応すると目される語が *bantamati* となっている。しかし、漢訳『摩登伽經』では「安荼利 槃荼利 摺由利 他彌葛賜帝 薩羅結利毘槃頭摩帝」(大正 21, p. 441c, ll. 16-17) と、*kārāṇḍe* の音写を欠くものの、「槃頭摩帝」は *bandhumati* の音写と見做される。また、ŚKA 校訂者 Mukhopadhyaya が所依としたベンガル写本 (Ms of the Asiatic Society of Bengal. Ms. no. B, 17) 及びパリのマイクロフィルム (Paris Ms. Microfilm of the Ms C⁵ of the Société Asiatique) によっても、*bandhumati* となっていることに加え、Cowell & Neil 刊本もパリのマイクロフィルムおよびケンブリッジ大学所蔵のネパール写本をもとに *bandhumati* と明記していることから⁴⁾、ここではやはり *bandhumati* の語を採用することにする。

すると、この *Bandhumati* は当然 *Bandhumati* の呼格と考えられるが、なにゆえ *ṢV* の呪部にこの語が挿入されているのかが問題となる。そこでまずは *bandhumati* が種々の文献においてどのように伝承されているかについて見て行くことにしよう。

1.2 *Dhiga-Nikāya* では次のように *Bandhumati* は *Vipassī* (Skt. *Vipaśyin*) の母であると記されている⁵⁾。

Vipassissa bhikkhave bhagavato arahatosammasambuddhassa Bandhumā nāma rājā pitā ahoṣi, Bandhumati nāma devī mātā ahoṣi janettī. Bandhmassa rañño Bandhumati nāma nagaraṃ rāja-dhāni ahoṣi.

このように、*Bandhumati* は過去第一仏とされている *Vipassī* の生みの母の名であると同時に、*Bandhumā* 王の都城の名であったとされている。漢訳『長阿含經』卷第一においても同様の記述が認められるが、そこでは「槃頭婆提」と音写されている (大正 1, p. 36, ll. 7-10)。さらに『ジャータカ』でも、*Vipassī* の母及び *Bandhumā* 王の都の名として *Bandhumati* があげられている⁶⁾。

ところが、*Avadānaśataka* では、*Vipaśyin* が *Bandhumati* という王城において仏事をなして涅槃界に入滅したとされ、その後 *Bandhumatā* 王がその舍利

を供養し、宝塔を建立したという記事が次のように見出される⁷⁾。

sa bandhumatīm rāja-dhānim upanīśritya viharati / yāvad vipaśyī samyaksaṃbuddhaḥ sakalaṃ buddha-kāryaṃ kṛtvā... abirdgement ...nirvāṇadhātau parinirvṛtas tato rājā bandhumatā bhagavantaḥ śarīre śarirapūjāṃ kṛtvā samantayojana-stūpaś catū-ratna-mayaḥ pratiṣṭhāpitaḥ...

このように、Bandhumati が Vipāśyin 仏の母であったという記事は認められない。また、*Divyāvadāna* 所収 *Aśokavarṇāvadāna*, *Māṇḍātāvadāna*, *Jyotiṣkāvadāna* においても Vipāśyin 仏が Bandhumati の王城に住したとするパラレルな一文が存在するが、Bandhumati が Vipāśyin 仏の母であったという記述は見出し得ない⁸⁾。しかし、伝承内容の差異は別として、いずれの伝承においても Bandhumati と過去七仏の第一仏とされる Vipāśyin(Vipassī) とが非常に深く結び付いていることについて異論はない。そうすると、これより ŚV の宗教的基盤が過去七仏信仰と深く関連しているという見解を導き出すことが出来るのである。

Ⅱ ŚV が過去七仏信仰と深く関わっているとすると、ŚV における ṣaḍ という数詞が何を指示し、akṣara が果たしていかなる語義を有しているかが問題となる。因に、漢訳『摩登伽經』では ŚV を「六句神呪」(大正 21, p. 400c) と訳しているが、どの語をもって「六句」となすかは明確でない⁹⁾。ところが、P.M. Modi 等は akṣara の通常の語義に加え、そのシノニムとして brahman, puruṣa, avyakta, māyā, prakṛti, buddha 等の語をあげている¹⁰⁾。すると、今仮にこの akṣara を buddha と同義に解すると、ṣaḍakṣara は「六仏」を指示することになる。確かにこの見解は飛躍の粹を脱し得ないと同時に、今ここでは過去七仏信仰の発展形態等について論じる余裕を持たない。つまり、ŚKA と過去七仏帰依文を説く代表的經典である *Ātānāṭiya-suttanta* との相関関係及びその新旧問題についての考察は別の機会に譲らねばならないであろう。しかし、上巻の ŚV の呪部に先行する散文において、ŚV が六人の正覚者 (ṣaḍ-samyaksambuddha) によって説かれたという文脈から考えると、ŚKA に説かれる ṣaḍakṣara は過去七仏を説く前段階での過去六仏を示唆しているという見方が可能となるのである。そこで、この見解をもとに、ŚV の宗教的基盤を探求する上で、今度は bandhumati 以外の呪部の語に着目してみよう。

Ⅲ ṢV の呪部における aṇḍare から bandhumati までの語のうち, arcihaste と kharagrive の語は写本によって異同が甚だしく語形を確定し得ないので, ここでは aṇḍare から keyure までの語を取り上げることにする。但し, これらが呼格で示された語とすると, <-e> 語尾より, <ā> 語幹もしくは <i> 語幹を持った語と解し得るが, ここでは語形上より <ā> 語幹を有する語と見做すのが妥当と思われる。そこで, 以下これらの語義を分かり易く列記することにしよう。

- (1) aṇḍarā → 現段階では部族名という語義のみ
- (2) pāṇḍarā → 部族名, 蛇神, 植物名 [学名 *Anogeissus Latifolia*; Dhaura, Dhava<Hindi>, Velly naga<Tamil>¹¹⁾; Dhavā, Dhaurā, Bākali<Hindi> Veḷḷanagai, Veḷḷanamai<Tamil>, Dhavaḥ<Skt.>, Veḷḷanava, Maḷukāñ-ñiraṃ<Malayalam>...etc.¹²⁾]
- (3) karaṇḍā → (竹細工の) 籠, 蜜壺, 剣, あひるの類, 植物名 [学名 *Mesua ferea*; Naga-kesera<Telgu>, Nagchampa<Malayalam>...etc.¹³⁾; セイロン テツボクとも呼ばれ, Nāgeśvara<Skt.> とも言われる。毒蛇に咬まれた時の治療に用い, 弥勒仏の持つ花とされている¹⁴⁾]
- (4) keyūrā → プレスレット, 植物名 [学名 *Pandanus odoratissimus*; Keor, kanta<Hindi>, Ketaka<Skt.>, Kotoki, Kanta<Bengal>...etc.¹⁵⁾; プラークリット語形では Keura¹⁶⁾; Ketaki<Skt.> という語形もある¹⁷⁾; アダンと呼ばれ, 蛇 (nāga) が棲む木と考えられており, シヴァ神がこの木の葉でガウリー (Gaurī) に慰められたと伝えられている¹⁸⁾]

以上のことから, aṇḍarā は別として, pāṇḍarā, karaṇḍā, keyūrā は全て植物名 (樹木名) を有し, どれもが蛇としての nāga と非常に深く結び付いていることが看取出来る。これをもって ṢV の宗教的基盤が nāga 族にあるというような安易な見解を打ち出すことは差し控えたい。しかし, pāṇḍarā 等の語義からは, 少なくとも ṢV が nāga 信仰と深く結び付いた, 固有の部族集団の宗教的基盤をもとに発生したものであることは容易に推察されるのである¹⁹⁾。

これまでの考察によって, ṢV が nāga 信仰や樹木崇拝と深い関わりを持っていることに加え, 過去七仏信仰の発展形態を知る上で非常に重要な位置を占めていることが確認出来た。ところが, 『孔雀明王経』において ṣaḍakṣari という女性形の神格が示されたり²⁰⁾, *Kāraṇḍavyūha* や *Sādhnamālā* に Oṃ maṇi padme hūṃ という 6 シラブルを有する ṣaḍakṣari-mahā-vidyā が説かれることはよく知られている²¹⁾。すると, これらと ṢV との相関関係を究明することが当

面の課題となるが、この問題に関しては別の機会に詳しく論ずることとする。

- 1) 拙稿「Śārdūlakarṇāvadāna における ṣaḍakṣara-vidyā—その後代への変遷形態について」『密教学研究』第26号, 1994, pp. 31-49.
- 2) W. Zinkgräf, *Von Divyāvadāna zur Avadāna-Kalpalatā, Ein Beitrag zur Geschichte eines Avadāna*, Heidelberg 1940, pp. 70-73.
- 3) *Śārdūlakarṇāvadāna*, ed. by Sujitkumar Mukhopadhyaya, p. 4, l. 19-p. 5, l. 4.
- 4) *Divyāvadāna*, ed. by Cowell & Neil, p. 613, l. 28-p. 614, l. 6.
- 5) *Dīgha-Nikāya*, Vol. II, p. 6, l. 30-p. 7, l. 2, PTS.
- 6) *Jātaka*, Vol. I, p. 41, ll. 9-19, PTS.
- 7) *Avdānaṣṭaka*, ed. by J.S. Speyer, p. 352, ll. 14-17.
- 8) *Aśokavarṇāvadāna* (Divy. IV, pp. 141-142); *Māndātāvadāna* (Divy. XVII, pp. 227-228); *Jyotiṣkāvadāna* (Divy. XIX, pp. 282-289).
- 9) チベット訳では yi-ge drug-paḥi rig-snags とされている (東北 No. 358, 417b⁴).
- 10) P.M. Modi, *AKṢARA, Forgotten Chapter in the History of Indian Philosophy*, pp. 67-70; Otto Strauss, *Bücherbesprechungen*, p. 127.
- 11) Dietrich Brandis, *Indian Trees*, London, 1921, p. 315; 尚, これらの基本的語義については, Böhtlink und Roth, *Sanskrit Wörterbuch*; Jacob Wackernagel und Albert Debrunner, *Altindische Grammatik*; M. Mayrhofer, *Kurzgefaßtes etymologisches Wörterbuch des Altindischen*; M. Williams, *Sanskrit English Dictionary* 等を参照。
- 12) Arya Vaidya Sala, *Indian Medicinal Plants*, 1, Orient Longman, 1994, p. 163.
- 13) op. cit., Dietrich Brandis, p. 55.
- 14) T.C. マジュプリア著・西岡直樹訳『ネパール・インドの聖なる植物』pp. 215-216.
- 15) op. cit., Dietrich Brandis, pp. 658-659.
- 16) R. Pischel, *A Grammar of the Prākṛit Languages*, Motilal 1981, § 126.
- 17) Rahul Peter Das, *Das Wissen Von Lebensspanne der Bäume Surapālas Vṛkṣāyurveda*, Stuttgart, p. 435.
- 18) op. cit., T.C. マジュプリア, pp. 191-192.
- 19) 樹木崇拜や蛇神崇拜はインドのみならず, エジプトやメソポタミヤ等各国で見られる特徴である。J. Fergusson, *Tree and Serpent Worship*, London, p. 3ff.
- 20) 『梵文孔雀明王經』田久保周誉校訂本, p. 37, l. 15; Tib. yi-ge drug-ma (東北 No. 559, 189a⁶); 僧伽婆羅訳『孔雀王呪經』「奢陀叉梨」と音写 (大正 19, p. 454b)
- 21) *Kāraṇḍavyūha*, Buddhist Sanskrit Text, No. 17, pp. 292, l. 15ff.; Tib. Hphags-pa za-ma-tog bkod-pa theg-pa chen-poḥi mdo (東北 No. 116, 264aff.); 『大乘莊嚴寶王經』卷第三 (大正 20, p. 59b); *Sādhana-mālā*, Vol. 1, Gaekwad's Oriental Series, No. XXVI, pp. 34-37.

〈キーワード〉 ṣaḍakṣara, Bandhumatī, 過去七仏, ナーガ崇拜

(高野山大学助手)